

**表題(日本語)**

夢の膜理論の枠組み——三島由紀夫『豊饒の海』とデイヴィッド・リンチ『Twin Peaks: The Return』の比較分析

**表題(英語)**

The Framework of Dream Membrane Theory: A Comparative Analysis of Yukio Mishima's *The Sea of Fertility* and David Lynch's *Twin Peaks: The Return*

**著者名(日本語・英語)**

村田 佳子郎(Keishiro Murata)

**要旨(Abstract)**

本稿は、三島由紀夫『豊饒の海』四部作とデイヴィッド・リンチ『Twin Peaks: The Return』を比較し、両者に共通する夢的構造を「夢の膜理論(Dream Membrane Theory)」として定式化する試みである。夢の膜理論は、物語世界における時間の反復、記憶の層位、観察者と演者の境界の揺らぎを説明する枠組みであり、映像と文学を横断する表象文化論的分析を可能にする。本研究は、異なるメディアと文化圏における夢の表象を比較し、その構造的共鳴を明らかにすることで、映像と文学の理論的接続に新たな視座を提供する。

**キーワード:** 夢の膜理論、震えの記憶、沈黙と叫び、三島由紀夫、デイヴィッド・リンチ、受容構造

序章: 夢と時間の哲学的問い – 夢の膜理論の枠組み

両作品には、以下のような共通構造がある。これらはすべて、夢の膜という不可侵の境界構造の異なる相を示している。

要素	『豊饒の海』 (三島由紀夫)	『Twin Peaks: The Return』 (デイヴィッド・リンチ)
時間	輪廻転生による時間の循環	25年後の再会、非線形な時間構造
夢	転生者の記憶／夢の中の真実	ブラック・ロッジ(以下ロッジ)／ローラの叫び
アイデンティティ	清頭→勲→ジン・ジャン→透	クーパー(無垢な理想主義者)→ダギー(ドッペルゲンガー)→ミスターC(ドッペルゲンガー)→リチャード(現実世界でクーパーから置き換えられた存在)
沈黙	聡子の沈黙＝夢の防衛	ローラの叫び＝夢の崩壊と再生
傍観者	本多繁邦＝膜の外側に立つ知性	視聴者＝膜の縁に留め置かれる準・侵入者

本論は、“行動者”と“観察者”の対立軸で夢と美の構造を読み解く。行動者は夢に生き、身体と沈黙によって美を体現する。観察者は語り・記録・分析によって構造に触れようとするが、本質には到達しえない。

夢の膜理論を操作概念として用いる。夢の膜とは、物語世界(内的領域)と外部(読者／視聴者)を隔てる不可侵の境界である。

- **侵入(裂傷)**: 現実的要素や「魂の震え」が膜へ注入される瞬間。美を起動する一方、膜に傷を残す。
- **編集(媒介)**: 注入された震えを符牒・記号・場のリズムへ翻訳し、持続可能化する働き。
- **保存(封印)**: 震えを記憶へ沈め、膜を閉じ直す過程。沈黙の倫理がここで作動する。

『豊饒の海』は前半で共感を促し、終盤(門跡空間＝月修寺最終場面)で構造が露出して分岐が生じる。

『The Return』は冒頭からロッジや電気、赤いカーテンを露出し、視聴者を常時「準・侵入

者」の位置に置く。この露出の差が、沈黙(封印)と叫び(再生成)の起動条件を左右する。以後、各章でその技術と倫理を検証する。

## 第1章: 不可侵の膜としての夢 – 沈黙と構造の美学

夢は**不可侵の膜**として機能する。膜は分子からなり、単分子膜と多分子膜に大別される。単分子膜は最小単位であり、「入る」ことは構造破壊に直結する。多分子膜は三次元的相互作用によって厚みを保ち、表層の分子を剥ぐ行為もまた破壊となる。

三島『太陽と鉄』の命題—リンゴや人の「中身」を見ようとする行為は死である—は、膜破壊の比喻であり、夢の構造にも等しく当てはまる。夢とは、記憶・感情・身体性の相互作用が張力(tension)を生む膜であり、知性の侵入はその張力を失わせる。

**微視的視点:** 分子間相互作用(記憶・感情・身体性)を闕下で捉える。

**巨視的視点:** 膜をモノリシックに扱い、機能のみを可視化する。

この二視点は、“行動者”と“観察者”の認識限界を刻印する。沈黙は**不可侵の膜**の保持手段であり、許されるのは機能の可視化＝場の特性・性質(音・色・間合い)の記述までである。

## 第2章:三島由紀夫の夢論と行動美学 — 戦前・戦中・戦後の連続と断絶

(『太陽と鉄』『豊饒の海』)

前半(『春の雪』『奔馬』『暁の寺』前期)では、松枝清顕(以下 清顕)、飯沼勲(以下 勲)、幼少期のジン・ジャンら**行動者**が膜内部で美を体現し、**観察者**・本多繁邦(以下 本多)は介入を拒まれる。

- **裂傷(侵入)**: 清顕と綾倉聡子(以下 聡子)の「結ばれ」は膜への裂傷＝魂の震えの注入。
- **修復(封印)**: 中絶は膜を修復へ転じる。
- **受容曲線**: 前半は共感が優位、構造は潜在化したまま累積する。

後半(『暁の寺』後期～『天人五衰』)では、転生者であるジン・ジャン、安永透(以下 透)の夢は破綻し、透は夢を見ない。京都-奈良間の移動に響く「コココーラの梵字…」は外来記号の浸透を示す。奈良・帯解の**月修寺**(圓照寺モデル)は、聡子の沈黙を外的に再現する私的な夢空間であり、**観察**・**解釈**・**侵入**を拒む聖域である。

本多は最終場面、紹介状を携えて月修寺を訪問するが、膜の外から観察する者であり、理性で膜を分解しようとして聡子に介入を拒まれ、存在の有無を逆照射されて失敗に終わる。

なお、月修寺は門跡寺院であるため宮中との関係が深く、訪問には相応の『資格』として、皇族・貴族(高貴)であること、または彼らの紹介状が必要である。

- **沈黙＝保存の倫理**: 語れば夢は壊れるため、沈黙は最後の砦となる。
- **観察者の失敗**: 本多の言語化は膜を分解する知性の暴力。許されるのは機能の可視化まで。
- **行動者の証明**: 祭事や訓練などの共有体験のみが保存に耐える結節点となる。

『豊饒の海』では、**戦前・戦中**(春の雪、奔馬、暁の寺<前期>)のエピソードで「夢」というキーワードが生きており、清顕、勲、幼少期のジン・ジャンといった**夢に生きる人間の美**が輝く。知性ある観察者(本多)はただ傍観しかできず、冷たくあしらわれ、介入を拒まれる。ここで問われるのは、夢に生きる『資格』＝高貴の有無である。

一方、**戦後**(暁の寺<後期>、天人五衰)では、前述のように転生者であるジン・ジャン、透の夢が破綻し、透に至っては夢を見たことすらない。同時代の連合国軍の占領政策を想起させる観察者の介入が行われ、夢を踏みにじるかのような転生の戯画化と、知性の醜さが露呈する。

こうして、戦後の断絶は夢の空間が外界から隔絶される条件を変化させ、その後の映像作品においても、夢の膜がいかにかに露出するかを規定する契機となった。

### 第3章:『The Return』における夢の膜理論 — 役割のトポロジーと原爆の位置づけ

#### 拡張と粒子の宇宙論

『The Return』においても、夢の中に生きる者＝**行動者**と、その外から眺める者＝**観察者**の対立が全篇の緊張をつくっている。夢の世界は外界と隔絶され、『豊饒の海』における**月修寺**に相当する。

夢の世界で象徴的に現れる**ブラックロジ**=**レッドルーム**は、多様な霊が行き交う“応答性”を備えた場であり、月修寺の応接・庭園が担う“応答の余白”に機能的に呼応する。**ホワイトロジ**は夢世界の“中核性”を担い、月修寺の“奥まった中心”に通じる静性と厳格さを思わせる。ただし空間の同一視ではなく、機能の相似に留める。

レッドルームに到達するには相応の『資格』=**身体同期**が必要な点でも月修寺に類似する。さらに、この隔絶空間は月修寺と同じく特定条件を満たす者にだけ開かれ、同時に映像的な可視化手段を多重化する。

#### 膜の露出と観察位置

夢の膜理論を操作概念として用いると、『The Return』は**冒頭から膜の縁を露出し**、視聴者を準・侵入者とする。赤いカーテン、電柱、低周波のハム、ロジの明暗分節がその可視化装置である。

#### 役割のトポロジー

- **侵入(裂傷)**: クーパーは救済衝動で裂傷を刻み、震えの過剰注入によってキラーボブ(悪の分子 以下 ボブ)を顕在化させる。
- **編集(媒介)**: ファイアマン(超越的存在)、マイク(元・悪の使徒)、丸太おばさん(地元の語り部)は震えを符牒・映像に変換。数字・座標・反復モチーフが媒介線となる。
- **保存(封印)**: ブリッグス少佐(電波観測に従事する空軍少佐)は受信-記録-痕跡化の回路を担い、死後も保存者として機能する。指輪やカーテンはバルブとして裂傷を閉じる。

裂傷は反復し、局所的な止血が繰り返される。

#### 行動者と観察者

- **行動者**: ローラ(善の分子)、ボブ  
彼らは夢の膜の内部論理に従って行動する。ローラは震えそのもの、叫びによって膜を反転・再生させる存在。善悪は役割分担であり、ボブは外敵ではなく膜内部の歪みの凝縮で、**排除ではなく再配列**が求められる。
- **侵入者(観察者)**: クーパー／ダギー／ミスターC、ウイングダム・アール(墮落した知性)  
“意志”を持って侵入し、現実の欲望を持ち込むことで内部論理を破壊する異分子。視聴者も準・侵入者として初期から膜露出に直面し、構造的違和感を抱く。
- **媒介者**: ファイアマン／マイク／丸太おばさん(FBIは高度な注釈機能を持つが通過条件を満たさない)

- **保存者**: ブリッグス少佐。ロッジ物理(指輪、カーテンの開閉)を通じ回路制御を行う。

震え(トリガ)と原爆の位置づけ

**震え(トリガ)**: ローラの叫びは膜の自衛行為であり、過剰侵入に対し反転=再生成を引き起こす。固有名(ローラ)と生活史(キャリア)の短絡を拒む。

『Twin Peaks』における原爆は、夢世界を拡張しボブのような悪の分子を激増させ、ローラという善の分子を送り込む契機となる。それは観察者の介入を直接増やすものではなく、**膜のスケールと相の数を拡張し、新たな粒子(善・悪、記憶、感情)を生む“ビッグバン”**である。

拡張と粒子生成

- **拡張(エクспанション)**: 従来の小宇宙(町、保安官事務所、高校)を超え、ロッジ物理が銀河規模で可視化され、露出はイベントでなく環境となる。
- **粒子生成**: ボブ=悪の微粒子の凝集核、ローラのオーブ=善の粒子(調律子)。どちらも拡張後の膜が内包した相。
- **媒介の更新**: 数字や座標、反復記号は増殖するが解像度は上がらず、観察者の理解は拡張の速度に追いつかない。

#### 第4章: 受容構造の差 - 露出度・移行タイミング・分岐

作品	夢の膜の露出度	共感の入り口	構造への移行タイミング	受容の分岐
『豊饒の海』	潜在→最終巻で露出	高	終盤(門跡空間=月修寺最終場面)	共感から分岐
『The Return』	常時露出	低～中	初期から	違和感／熱狂／拒絶

##### 『豊饒の海』における受容

『豊饒の海』の読者は、**夢の膜**の露出度が高くなるまではストーリーを感情的共感のうちに受容している。夢の論理は物語の深層に潜み、読者は“輪廻”や“予感”を情緒として受け取る。これは、**行動者の表面的行動と深層面での夢の世界の行動が一致しており、深層構造＝夢の膜の存在が認識されにくい**ためである。

『天人五衰』、特に**月修寺**での聡子と本多の最終場面では、夢の膜が露出し、夢の論理が**構造として顕在化**する。物語は“震えの記憶”として閉じ、本多の記憶は崩壊し輪廻は否定される。読者は**感情的共感から構造的震えへ移行を迫られ**、観察者としての自身の位置と、行動者からの拒絶をどう受け止めるかで受容が分岐する。

##### 『The Return』における受容

一方『The Return』の視聴者は、夢の膜が**常時露出**しているため、感情的共感を持ちにくい。クーパーは表層的には夢を信じる理想主義者として描かれるが、夢世界では膜に裂傷を与え侵入し秩序を乱すことで、ボブの暴走を加速させる側面を持つ。この二面性は他の登場人物にも共通する。

物語の**表層的ジャンル**(ミステリー／ホラー)と**深層的構造**(夢の膜理論)は乖離しており、期待された“解決”は訪れず、構造的“震え”だけが残る。

表層と深層における**クーパー＝侵入者／ボブ＝論理の実体**という逆説が、感情的共感を阻む構図を形成する。

視聴者が“善悪”や“因果”で読み解こうとすると、夢の膜の論理に基づく構造は理解不能に映る。さらに、物語が**記憶と震え**によって進行し、詩的論理でしか語られないため、共感を得る前に**構造的違和感へ直面**することになる。

## 第5章:沈黙と叫びの倫理 – 封印と再生成の二形態

沈黙(保存)と叫び(再生成)は、同一の自衛回路が、異なる圧力条件下で作動した結果である。

- **聡子の沈黙=封印の倫理**: 裂傷後の封緘。震えを言語化に渡さず、記憶として沈めることで膜厚を回復させる。
- **ローラの叫び=再生成の倫理**: 侵入過剰への応答。固有名と住所の一致を破碎し、構造を更新する。破断は終わりではなく、延命の契機である。

**行動者の責務**: 理解を担わず、維持と再生を担う。観察者の最良の関与は「介入しないこと」である場合が多い。

結論: 膜の存続へ - 介入なき関与の技術

本論は夢の膜を「**侵入-編集-保存**」の回路として定義し、三島とリンチを封印と再生成の**相補関係**に置いた。

- 『豊饒の海』: 沈黙によって裂傷を封じ、美の厚みを保つ倫理を結晶させた。
- 『The Return』: 叫びによって過剰侵入を反転し、構造を更新する倫理を提示した。

両作品は、夢の膜に刻まれた震えが物語を駆動する**記憶の構造**として機能する点で近似し、観察者の言語的分解を拒む点でも一致する。

震えとは、語りえぬものが残す痕跡であり、夢の膜に刻まれる**倫理的振動**である。

構造的類似性: 夢の膜と震えの記憶

要素	『豊饒の海』	『Twin Peaks: The Return』
夢の膜	輪廻・予感・記憶の断片として潜在	ブラックロジック・ファイアマン・座標として顕在
震えの記憶	清頭→勲→ジン・ジャン→透	ローラ→クーパー→少佐→震えの座標として継承
編集点	月修寺での「記憶の崩壊」	「構造の再編」としてのエピソード群
受容者位置	感情的共感 → 構造的理解への移行	構造的違和感 → 震えへの没入(または拒絶)

理路の到達点と受容者の技術

- **理路の到達点**: 夢は壊される前に形を変えて生き延びる。封印と再生成はそのための二枚刃。
- **受容者の技術**: 冒頭で語を定義し、以後は「沈黙=封印」「叫び=再生成」の二語で往還。台詞ではなく**場の粘度**(音・色・間合い)を記述し、単分子膜の瞬間は因果を語らず痕跡のみを記録。

倫理的行動の勧告

越境欲望を自制し、保存と再配列のプロセスに**身体で同調**すること。それが膜の存続に資する最小の技術である。

## 参考文献

### 日本語文献

三島由紀夫 (1970-1971) 『豊饒の海』全四巻. 新潮社.

三島由紀夫 (1968) 『太陽と鉄』講談社.

### 欧文文献

Briggs, C.L. (1996) 'The Politics of Discursive Authority in Research on the "Invention of Tradition"', *Cultural Anthropology*, 11(4), pp. 435-469.

Cavell, S. (1979) *The World Viewed: Reflections on the Ontology of Film*. Harvard University Press.

Deleuze, G. (1989) *Cinema 2: The Time-Image*. Translated by H. Tomlinson and R. Galeta. University of Minnesota Press.

Lynch, D. (2017) *Twin Peaks: The Return*. Showtime.

Marks, L.U. (2000) *The Skin of the Film: Intercultural Cinema, Embodiment, and the Senses*. Duke University Press.

Mulvey, L. (1975) 'Visual Pleasure and Narrative Cinema', *Screen*, 16(3), pp. 6-18.

Žižek, S. (2000) *The Art of the Ridiculous Sublime: On David Lynch's Lost Highway*. University of Washington Press.